Charles Pictet de Rochemont

Quand Genève devint un canton suisse

シャルル・ピクテ・ド・ロシュモン
ジュネーブがスイスの州になるとき

「好意を示せば、好意を得る。
心と行動に正義を持って接すれば、それは自分に戻ってくる。
間違っていることに対し間違いだと言えることができれば、
つまりいつも非難し、疑い、警戒し合い、軽率に憎んだり
しないこと、そうすればそれに相応しい扱いを受ける。
敬意があれば、信頼関係ができた瞬間に全てが容易くなる。
それが真の外交だ。」

シャルル・ピクテ・ド・ロシュモンからP.E.ド・フェレンベルグへ
(1816年4月23日)

シャルル・ピクテ・ド・ロシュモン
ジュネーブがスイスの州になるとき

今からちょうど200年前の1814年10月、ウィーン会議が始まりました。そこにはヨーロッパの大国の指導者と並んで小さなジュネーブの代表団が参加していました。彼らが後にジュネーブ共和国の運命とヨーロッパにおけるスイスの地位を変えることになります。

1814年とはジュネーブの歴史において非常に重要な年です。小さな共和国は、ほぼ300年間の独立と16年間のフランスによる支配の後、スイスの22番目の州(カントン)になろうとしていたのです。

このジュネーブの歴史の重要な局面において一人の人物が大きな役割を果たしました。それがシャルル・ピクテ・ド・ロシュモン(Charles Pictet de Rochemont)です。一見では、ランシーに住むこの控えめな農学者が国際政治において活躍する運命であったようには見えませんが、しかし彼は1814年1月から早々に、ポスト・ナポレオン時代のヨーロッパの地図を書き直す大きな会議において、ジュネーブ、さらにはスイスの外交団長となりました。

ピクテ・ド・ロシュモンは、交渉者としての才能と自らの人脈を生かし、その短くも輝かしい外交キャリアの間に新しいジュネーブ州の境界(現在のもの)を定めることに成功しました。さらに彼は、当時のヨーロッパの全ての大国にスイスの中立性を承認させ、それを守らせました。

今日でもジュネーブへの彼の功績の記憶があちこちに刻まれています。1894年に彼を称えて命名された、オー・ヴィーヴ広場とオー・ヴィーヴ駅を結ぶピクテ・ド・ロシュモン大通り、1970年にトレイユ坂の上に建てられた銅像、ピクテ・ド・ロシュモンの旧邸宅内にある現ランシー市役所などです。

以上のことから、ジュネーブのスイス連邦加盟200年を祝うこの年に、ピクテ・ド・ロシュモンが果たした重要な役割を回顧し、ピクテ家のこの偉大な人物の類まれな経歴を皆さまにご紹介することが、私たちにとって重要であると考えています。

monsieur Lavoisier, votre lettre du 17. — Je vous remer-
tes empressements à m'annoncer qu'on pense à me
que vos demandons. Les 2 jeunes gens sont comblés
comme je l'espère, ils sont bien employés, mais les G
R. ne tourmentent encore d'avantage. Je n'y croirai
que quand elles seront dans ma bergerie, parce que j
pétition du T. & qu'il a de bons droits pour être
tout comme vous qu'il conviendra de ne faire que m
mes avant prairial, vu ce qu'il pourra arriver, ne
40: si elles qui ont des aiguilles avaient l'attention
soin, je leur en saurais bien bon gré: j'en ai plein
Lorsque je dis 40, on peut aller, ce n'est que pour
inquiéter indécent comme notre de pactiser. Mon berger
pas encore de nouvelles, doit aller jetter ses plaintes à
après son arrivée à l'école d'Alfort. Je lui ai
être modeste, & de se rendre agréable au grand
Lorme chef berger, & qui a l'oreille du Prince Bourgu
en vain annoncer de nos espérances, afin désespérer
tories. Il paroit avoir bien compris.
Sur soupçon, le brevet d'exemption ou intermédiaire ne
taffes de challer est demandé, & payé d'avance
dans le véritable esprit fiscal. Soumis jai à
ne me croyez pas un étourdi, je vais vous dire

ある中道自由主義のジュネーブ人の青年時代と経歴

教育と精神

シャルル・ピクテは1755年9月21日にジュネーブで生まれました。父親のシャルル・ピクテ・ド・カルティニー(Charles Pictet de Cartigny)は当時オランダの傭兵大佐でした。独立的な精神を持っていた彼は、小市参事会(政府)がルソーの『エミール』と『社会契約論』を出版禁止にしたとき、公にルソーに味方した唯一の貴族でした。そのため彼は非難され、拡大市参事会(州議会の前身)から一時的に追放されました。

息子のピクテは、1768年からハルデンシュタイン(グラウビュンデン州)の学校に入り、しっかりしたヒューマニズム教育を受けました。またそこでドイツ語、英語、イタリア語を学ぶとともに、スイス全土から集まった生徒たちと交友を深めました。軍人を志し、10年ほどフランスのスイス傭兵として働き、1785年にジュネーブに帰るとその1年後にアデライド・サラ・ド・ロシュモン(Adelaïde Sara de Rochemont)と結婚し、ジュネーブの慣習に則り妻の苗字をつなげた名前を名乗り始めました。

ピクテ・ド・ロシュモンはジュネーブで拡大市参事会に入り政治家のキャリアを積み始めました。1790年には検事(司法官)となり、ブルジョワ民兵の4つの大隊の一つを指揮し、そのための訓練指示書も作成しました。

アンシャン・レジームの崩壊

1792年、フランス革命軍がジュネーブを包囲し街中で反乱を起こし、アンシャン・レジーム体制は崩壊しました。ピクテ・ド・ロシュモンは、革命に関して批判的ではありましたが、ジュネーブ新国民議会の一員となりました。しかし、最初は穏やかであった革命は徐々に激しさを増し、義弟のジャン-フランソワ・ド・ロシュモン(Jean-François de Rochemont)が革命裁判所により死刑判決を受け、1794年に刑が執行されました。ピクテ・ド・ロシュモン自身は、カルティニーの農民の働きかけにより、元検事として1年の自宅拘留刑のみとされました。政治の過激さに嫌気がさし、その後20年以上、彼は政治の世界から遠ざかることとなります。

活動的な「引退」

公的世界から退いたピクテ・ド・ロシュモンは、だからといって遊んで暮らしたわけではありませんでした。1795年、アンクル・サムの国をテーマとした初のフランス語作品の一つ『アメリカ合衆国の光景』(Tableau des Etats-Unis d'Amérique)を出版します。またイギリスに旅行しその体制に感銘を受け、あるいは産業革命の起源的経済活動(パキの瓦)も試みました。しかし特筆すべきは、その後20年間続く彼の主要な活動となる「農業」を開始したことです。

1796年には、兄と共同で『イギリス図書館』(Bibliothèque britannique)を刊行しました。フランス語圏読者に文学・科学分野の翻訳記事を紹介するこの雑誌は、ジュネーブの大部分のエリートたちのイギリスかぶれを象徴するものでした。彼はこの雑誌に農業欄を掲載し、友人のエマニュエル・ド・フェレンベルグ(Emmanuel de Fellenberg)とそのホフヴィル研究所(Institut d'Hofwyl)の研究を熱心に報じつつ、教育において農業がもたらす利益を主張したのでした。ヨーロッパの多くのエリートたちがこの刊行物を読んでいました。

農業から外交へ

ジェントルマン・ファーマー

ピクテ・ド・ロシュモンは、幼少期からカルティニーにある家族の家で田舎生活の基礎を教わっていました。農家言葉を学び、耕作、牧草、刈入れ、ブドウの収穫を覚え、また家畜の世話も覚えました。故に政治から離れた後に農業に目を向けたのは、彼にとってはほとんど自然なことでした。ただそれは単なる情熱以上のものであり、彼は数年で農学分野の顔を成す人物の一人となります。

ジュネーブのメリノ

1798年に妻と共に75ヘクタール以上広がるランシーの土地を手に入れた彼は、ランブイエから雌のメリノ(羊)を取り寄せました。メリノたちは順応し、ジュネーブの肥沃な土地で順調に数を増やしました。そして当時、今日では「科学的」と呼ばれるであろう方法で(羊の交配、最良の飼料の選別、人工牧草地の設置など)、最も上質な羊毛を手に入れるために品種を改良しました。次に、紡績と織物の職人を養成し、機械を設置し、イギリス人がカシミヤから輸入している有名なインドのものと類似のショールを生産し始めます。こうして、1806年、ジュネーブでは9600頭以上のメリノ羊を数えました。

これと並行して彼は土地を耕し、それまで使用していた鋤を捨て、より現代的な設備を持ち込み、ジュネーブにトウモロコシ栽培を導入しました。地域の多くの農民は、自分たちの働き方を改善すべく彼を模範としました。

ランシーからオデッサへ

1805年、ピクテ・ド・ロシュモンはハンガリーに8万フラン分の羊を売却します。さらに4年後には800頭以上の羊をウクライナに出荷しました。そのとき出荷責任者として長男のシャルル-ルネ(Charles-René)を送り、彼は5年間そこに残り家畜を育てました。オデッサ近郊のその土地は、ナヴォイ・ランシーと名付けられました。ピクテ・ド・ロシュモンは羊を介してヨーロッパ中の重鎮と知り合いました。特に、当時亡命中で、皇帝アレクサンドル1世(Alexandre 1er)の計らいにより新ロシアと呼ばれた土地の総督を務めていたリシュリュー(Richelieu)公爵と定期的に連絡を取っていました。

経済的にも知的にも満足していたピクテは、この田舎生活をそのまま続けることができたでしょう。しかしながら、政治と歴史がこの控えめな農学者を再びその渦に巻き込んでいくのです。

ジュネーブのための外交官

1813年秋。ナポレオン・ボナパルトの軍は、ライプツィヒでロシア、オーストリア、スウェーデン、プロイセンの連合軍に敗れ、その後もフランス軍は至る所で撤退しました。オーストリア軍がスイスを横断し12月にジュネーブを支配すると、ジュネーブ共和国は同月31日に復興しました。しかし、ジュネ

ーブ国民の間にはある感情が広がりました「ジュネーブはもはや1798年以前の状況ー大陸の真ん中の小さな独立国ーには戻れない。スイス連邦に属さなければならない…。」

この変動の先頭に現われたのが、ピクテ・ド・ロシュモンでした。農学者から政治家に復帰した彼は、早くも1813年12月31日、暫定政府宣言の3人の起草者の一人に名を連ねました。そして1月1日、フランス軍に勝利した君主たちが集まるバーゼルに、ジュネーブ代表として赴くよう任命されたのです。

大会議　交渉術と人脈の力

ピクテ・ド・ロシュモンは、60歳にして外交という新たなキャリアを始めることになります。それはほんの2年ほどですが、この間に彼はパリからウィーンへ、そして再びパリへ、最後にトリノへと奔走しました。一見そうは見えませんが、彼の経歴の全てがこの時のための準備となっていたのです。独立的精神に満ちた家族、多言語の習得、政治に対する穏健な考え方、フランスでの軍人経験、『イギリス図書館』の編集、そしてヨーロッパの多くの統治者に売ったメリノの羊毛…。

パリ会議：最初の敗北

しかしピクテの国際舞台へのデビューは複雑なものでした。1814年春にジュネーブ政府からパリに派遣された彼の主な目的は、フランス側の複数のコミューン(自治体)の譲渡を獲得し、ジュネーブの領土の飛び地をなくすということでした(当時のプレニーとヴェルソワはフランス領でした)。この最初の会議において、無経験のこの外交官は、ジュネーブからの矛盾した命令を受けた上、フランスを代表する外交の達人タレーラン(Talleyrand)と対立し、結局は、ヴェルソワの道路の通行権以外ほとんど何も得ることができませんでした。

パリではフランスの運命が定まりました。条約に従い、ヨーロッパは数か月後ウィーンに再集結することとなりました。

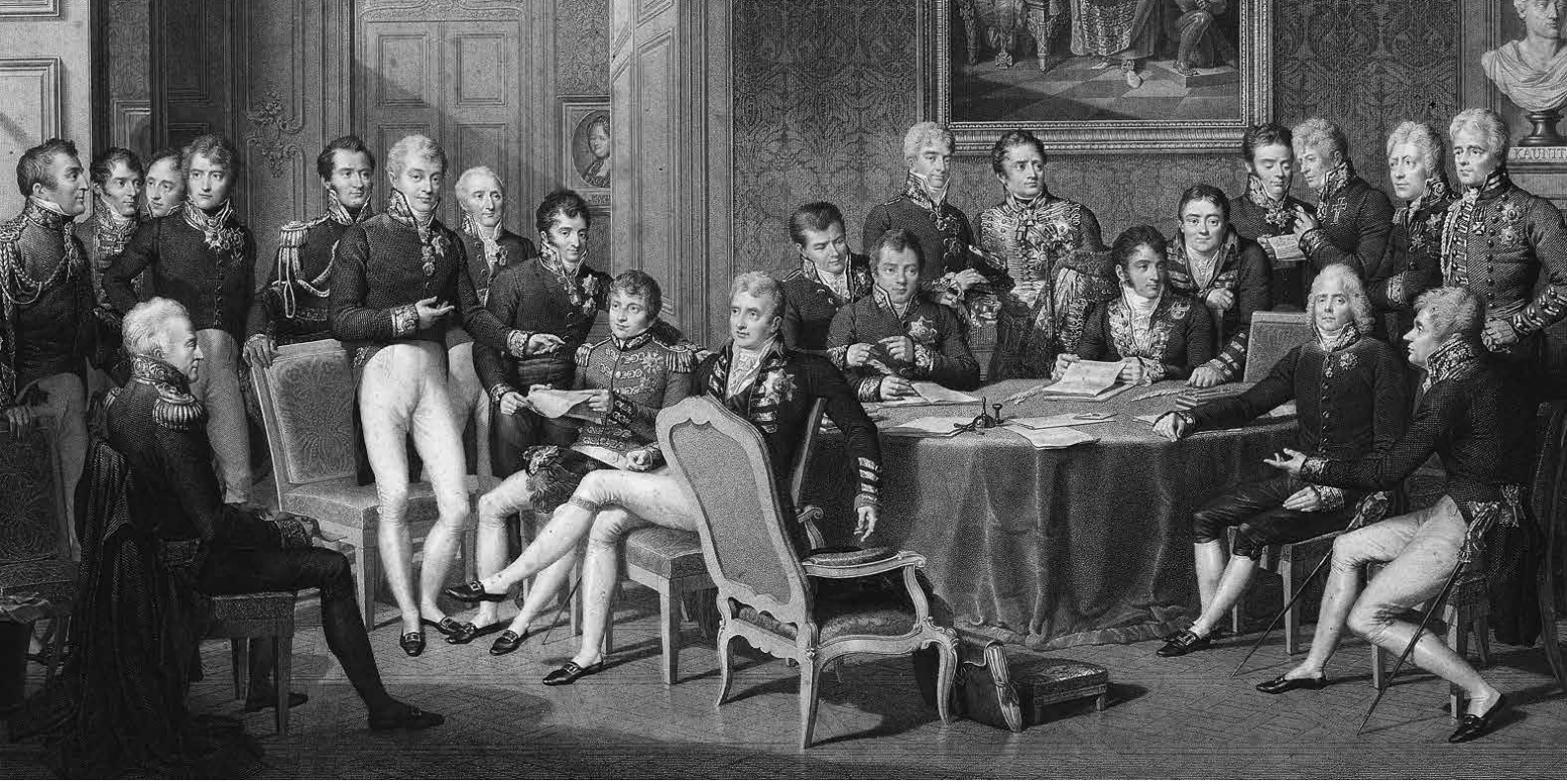
ウィーン会議

1814年10月、ウィーンで交渉は再スタートします。7カ月に渡り、ヨーロッパ中の国々が、ナポレオンから取り戻した領土の今後を定めるためオーストリアの首都に集まりました。このウィーン会議は非常に不思議で、全員出席の審議はほとんどなく、様々な決定はプライベートサロンや舞踏会の合間、あるいはその他の社交界の催しの場といった所で行われました。

この会議にはシャルル・ピクテ・ド・ロシュモンに加えてジャン-ガブリエル・エナール(Jean-Gabriel Eynard)とフランシス・ディヴェルノワ(Francis d'Ivernois)が同行していました。また、当時皇帝アレクサンドル1世に仕え経験豊かな外交官であったケルキラ島のジャン・カポディストリアス伯爵(Jean Capo d'Istria)も相談役として同行し、素晴らしい助言を惜しみなく与えました。ピクテの姪でありエナールの妻アンナ(Anna)(旧姓リュラン(Lullin))も貴重な切り札となりました。というのも、交渉につながる社交界の催しへの魅力的なジュネーブ人女性の参加は多くのサロンの扉を開かせ、そこでピクテ・ド・ロシュモンは、特にサルデーニャ王からの重要な譲渡獲得に成功し、レマン湖左岸のジュネーブ領地の飛び地を無くすために必要なコミューンを手に入れました。

しかしパリの時と同様、ピクテらの前にタレーランが立ちはだかります。この外交官は、敗北し最初は孤立していたフランス側に、ナポレオン戦争の勝者たち(イギリス、ロシア、オーストリア、プロイセン)が自国に定める運命に不安を抱いていた一連の小国を巧みに集めていました。ジュネーブに対しては、タレーランは情け容赦ない態度を見せ、レマン湖右岸のコミューンに関して一切譲渡しませんでした。小さな共和国の要求に苛立ったタレーランは、「世界には5つの大陸と、ジュネーブがある」と評したほどでした。

1815年4月、このウィーン会議は突然中断されました。蓋然性のないナポレオンの復権と百日天下が起こりましたが、それは1815年6月にワーテルローで終わりを迎えました。ボナパルトは決定的に敗北、セントヘレナ島に幽閉され交渉は1815年8月にパリで再開されることとなります。



第2回パリ会議での決定的な成功

この間、1815年5月19日にジュネーブはスイスに加盟しました。これによりピクテ・ド・ロシュモンは、パリにおいて新たな州と同時にスイス連邦を代表することになりました。よって今度はより強固な外交的地位とより優れた任務命令を受け、再びパリを訪れたのでした。さらに、タレーランは失脚しフランス代表としてピクテの前に現われたのは、オデッサの羊牧場を通して知り合ったリシュリュー公爵でした。1815年11月20日のパリ条約の締結により、ピクテはフランスから6つのコミューン(プレニーとヴェルソワを含む)を獲得し、これによりジュネーブとスイスは隣接した境界線を持つことができました。ペイ・ド・ジェクスはフランス領のまま残りましたが、経済的に州と連携する無関税地域となりました。

ピクテ・ド・ロシュモンの決定的な成功はスイス連邦にもたらされました。彼は、彼自身が作成した正式宣言の中で、スイスの中立性と不可侵性は「ヨーロッパ全体の真の利益に合致する」ことをヨーロッパの大国に認めさせたのです。

1816年のトリノ会議では、ピクテ・ド・ロシュモンはウィーンでの決定の遂行、特にサヴォワ地域とレマン湖左岸(エルマンスまでの湖岸)のコミューンの土地の割譲の実現に力を注ぎます。また1816年3月16日のトリノ条約では、スイスの中立的地位が強化されました。

外交官としての仕事を終えたピクテ・ド・ロシュモンは、1816年夏には早々と鋤と羊の待つ田舎へ戻り、その後は公的世界には稀にしか顔を出すことはなく、1824年にランシーでその生涯を閉じました。

ジュネーブ州と中立性という遺産

ジュネーブにもたらされた成功・・・

こうしてジュネーブは1816年に飛び地がなくなり、その歴史上初めて、今日と同じ一つにまとまった領土を形成しました。ピクテ・ド・ロシュモンは、当初はジュネーブのためにサレーヴ、モン＝シオンとヴュアシュの山々の自然境界線をベースとしたより広大な領土を願っていました。しかしながらこの小さな州の周囲(ペイ・ド・ジェクスとサヴォワの一部地域)は無関税地域となったため、ある程度の中期的経済永続性が保証されることになりました。ピクテ・ド・ロシュモンが勝ち取った国境とともに、改革を乗り越えた昔からのジュネーブ人と新たに加わったコミューンのカトリック系農民たちの統合から成る、新しいジュネーブ州民が誕生しました。

・・・スイスにもたらされた成功

1821年、ピクテは『ヨーロッパの利益となるスイスから』(De la Suisse dans l'intérêt de l'Europe)と題した小冊子を刊行し、そこにおいて、ヨーロッパはスイス領土の安全保障と不可侵性の防衛をスイス自身に任せなければならないと強調しました。そして実際にスイスの中立性が再議論されることはありませんでした。こうして、中立性はピクテ・ド・ロシュモンがスイスにもたらした最も貴重な遺産となったのです。中立性は、ヨーロッパの歴史の多くの紛争からスイスを守る一方で、赤十字国際委員会や国際連盟(1945年から国際連合)などの機関の設置や発展を促し、世界におけるスイスの調停者としての役割を高めることにもなりました。

ジュネーブ州の形成(1815-1816年)

1798年のジュネーブ領土

1815年と1816年の獲得領土

Bossy(ボシー):1815年にフランスから譲渡されたコミューン

Anières(アニエール):1816年にサルデーニャから譲渡されたコミューン

Colovrex
Valavran
Malagny
Bellevue
Grand Saconex
Chambeisi
Pregny
Tournay
angeron
Chambeisi dessous
Petit Saconex
Pregny dessous
Ch. de Pante
la Barrière
Morillon
Varembé
Secheron
S. Jean
les Paquis
GENÈVE
les Eaux vives
Pressi
Cologni
Chougny
Grange Canal
Mt.
Chevri
la Seme R.
CHENE
Pont B.
Rupinge
Tonex
Moille-seule
le Foron R.
Ambilli
Chez Ledens
Sierne
Veiri
Cornière
Gaillard
PARTIE

資料

1

2

3

La premiere carte du Canton de Genève
employée par M. Pictet de Rochemont pendant son Voyage à Paris en Mars 1814;
complétée et coloriée en 1816
CARTE DES ENVIRONS DE GENÈVE

シャルル・ピクテ・ド・ロシュモン
ジュネーブがスイスの州になるとき

1. 娘のアメリー(Amélie)が描いた

   シャルル・ピクテ・ド・ロシュモン(未完成) 1820年頃

   水彩 21.5 x 16 cm ピクテ家アーカイブ財団所蔵

2. シャルル・ピクテ・ド・ロシュモンに宛てた

   連邦議会の請願書 1816年7月18日 押印付き文書

   60 x 43 cm　ジュネーブ古文書資料館所蔵

   家系アーカイブ第1組　ピクテ・ド・ロシュモン第15番

3. 1814年のパリ会議でピクテ・ド・ロシュモンが

   手書きで注釈を加え使用したジュネーブ周辺地図

   56 x 77 cm　ピクテ家アーカイブ財団所蔵

文：ローラン・クリステレー(Laurent Christeller)
構成：キャロリーヌ・ボケ(Caroline Bocquet)
シャルル・ド・ピクテ・ド・ロシュモンに宛てた連邦議会 の請願書を貸与いただいたジュネーブ古文書資料館(Archives d'Etat de Genève)に感謝いたします。

ピクテ家アーカイブ財団(Fondation des archives de la famille Pictet)-2014年